



Title	『漢語訳解普通用文章』の漢語：左ルピに用いられた漢語をめぐって
Author(s)	小椋, 秀樹
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1995, 29, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47845">https://hdl.handle.net/11094/47845</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『漢語 訳解 普通用文章』の漢語

——左ルビに用いられた漢語をめぐって——

小 棟 秀 樹

はじめに

明治期の往来物には、『漢語用文』（明治五）、『漢語文章大全』（明治五）などのように、書名に「漢語」を冠するものが多くある。<sup>(1)</sup>それらの往来物では、漢語が多く用いられており、そのことが大きな特徴となっている。また、本文に用いられた漢語には、多くのばあい語形を示す右ルビと、語義を示す左ルビとが付されている。その左ルビに用いられている語は、和語が中心であるが、しばしば漢語も見られる。本文に用いられている漢語の性質などについて調査することは、明治期の往来物の語彙研究として重要なことであるが、それと同時に、左ルビの漢語も本文の漢語とは異なる性質を持つ、ある一群の語と考えられることから、これらについて考察を加えることも必要である。そこで、本稿では、明治期の往来物のなかから『漢語訳解普通用文章』（明治五）をとりあげ、その左ルビに見られる漢語の性質について検討し、あわせて、往来物の語彙の研究にどのように利用できるかについて考えてみたい。

## —

今回とりあげた『漢語普通用文章』の書誌は、次のとおりである。

- 書名 内題『普通用文章』
- 著者 萩田長三
- 出版 浪華 寶文堂藏
- 大きさ 縦一七・五センチメートル 横一二センチメートル
- 丁数 序四丁 目次七丁 本文九七丁
- 書状 六四通

本稿で『漢語普通用文章』（以下、本書の書名は内題によつて『普通用文章』と記す）を資料とした理由は、次の二点である。

- 一・著者の萩田長三は、漢語辞書『新令字解』（慶応四）の編纂者でもある。したがつて、同一人物が編纂した往来物と漢語辞書との収録語彙の差異や共通点など、今後調査することができる。
- 二・本文中の漢語に対し、詳細に左ルビを付しているので、多くの用例を得ることが可能である。

## 二

本節では、『普通用文章』の左ルビの漢語の性質について考察を加えることとする。

まず、考察に入るまえに、右ルビと左ルビとが、どのように施されているのかを見ておく」ととする。『普通用文章』では、右ルビはひらがな、左ルビはカタカナで書かれている。左ルビに漢語が用いられているばあいも、カタカナで表記されており、漢字は用いられていない。また、右ルビは語形を示し、左ルビは語義を示している。つぎに、その例をあげておく。

鳳曆  
改端千里同風芽出度申取候

(一〇)

ところで、辞書の語釈などの解説の中で用いられている漢語について論じたものには、山田(一九七五)、土屋(一九八四)、湯浅(一九九一)などがある。山田(一九七五)では、明治期の漢語辞書を資料として、その語釈に用いられている漢語を、次の二点から、日常に用いられる平易な語と考えている。

### 一・解説にならう語である。

二・かな書きされており、漢字表記という便宜をとらなくとも容易に意味が理解できる語と考えられる。

土屋(一九八四)、湯浅(一九九一)も山田と同様、語釈中の漢語を日常語ないし、一般性の高い語と考えている。そして、土屋は『日本国語大辞典』に江戸時代以前の用例のあることを、湯浅は『書言字考節用集』『大全早

引節用集』に登録されていることを基準として、日常語ないし、一般性の高い語であるとの検証を行っている。

本稿で問題としている『普通用文章』の左ルビに用いられた漢語も解説をになう語であり、かつ、かな書きされていることから、一般語と仮定される。そこで、次に、この点について検証を行うこととする。

調査にあたっては、江戸後期口語資料の中から『浮世風呂』『浮世床』『夢酔独言』の三種を用い、『普通用文章』の左ルビの漢語がどの程度、これらの資料で用いられているかを見ることとする。このような調査には、土屋や湯浅のように辞書を利用する方法があるが、実作のほうが当時の言語の実態をより反映していると考え、これら三つの資料を用いることとした。なお、比較資料として『普通用文章』と同年代の口語資料『安愚樂鍋』を使う方法も考えられる。しかし、『安愚樂鍋』は、漢語流行期の資料であり、鄙武士・新聞好の漢語使用について、かなりの誇張があるとの報告がある<sup>(2)</sup>。それゆえ、比較資料としては不適当であると考え、今回の調査では用いなかつた。なお、『浮世風呂』『浮世床』については、会話文のみを調査対象とした。

調査の結果は、表（本稿末尾）のとおりである。表には、まず『普通用文章』の左ルビの漢語を五〇音順に一覧した。そして、各語の下に、『浮世風呂』に用いられていれば「風」、「浮世床」に用いられていれば「床」、「夢酔独言」に用いられていれば「夢」と記した。『浮世風呂』に用いられている語は五三語、『浮世床』に用いられている語は五五語、『夢酔独言』に用いられている語は六七語となつた。また、今回調査した三種の江戸後期の口語資料のどれかひとつに用いられている語は八七語で、全体の約八割にあたる。残りの二割の語については、たまたまこれら三種の資料には用いられていなかつたという可能性があり、さらに調査対象を広げれば、口語資料での使用を確認できるものと思われる。したがつて、『普通用文章』の左ルビに用いられている漢語は、おおむね当時の一

般語の考へるにいがだよ。

なお、左ルビに用いられている漢語のうち、「シサク（詩作）」「セイヤウ（西洋）」の二語は『和英語林集成』初版で、次のように「文章語・古語」の母(+)を付された。<sup>(3)</sup>。

† SHI-SAKU, シサク, 詩作, Making verses, or poetry. ....

† SEI-YŌ, セイヤウ, 西洋, n. Western countries.

しかし、話しいんばにおふて、「シサク」「セイヤウ」に代わるほかの表現があるとは考えにくいいかひ、これの二語は、話しいんばにおいても用いられた可能性が高いと思われる。したがつて、これら二語は、かなりやしむ「文章語・古語」ではなく、一般語と考へるべきである。<sup>(4)</sup>

「シロウ（時候）」「シヨウチ（承知）」「ハイケン（拝見）」の三語は、本文と左ルビとの両方に用いられているところ点で注意される。『普通用文章』の本文に用いられている語については、その序文に「雅俗混淆」とある。ハリヤヒラ、「俗」語は、当時の一般語のことを意味のであらう。したがつて、「シロウ（時候）」「シヨウチ（承知）」「ハイケン（拝見）」は、一般語が本文に用いられている例と考えられる。なお、「シロウ」「シヨウチ」については、次のように左ルビが付されているばかりある。

『漢語解説普通用文章』の漢語

足下平常の御締交の事承知仕候

(四六ウ)

これらの一例については、「ジセツ」「ゾンズ」は、「ジコウ」「シヨウチ」の語訳として用いられているというよりは、同じ一般語で言いかえただけであるという可能性があろう。『普通用文章』の左ルビの付しかたについて検討する必要もあるかと思う。今後の課題としたい。

### 三

前節で見たように、『普通用文章』の左ルビに用いられている漢語は、その約八割が『浮世風呂』『浮世床』『夢醉独言』の三種の江戸後期口語資料に用いられているので、当時的一般語であると考えられる。この結果をふまえて、本節では、『普通用文章』が往来物の語彙の研究にどのように利用できるのかということを考えることとする。

ところで、往来物の語彙の研究は、いまだ十分に進んでいない状況であるが、そのようななかで、往来物の語彙について言及したものとして、橘（一九七七）があげられる。橘（一九七七）では、往来物に日常語が多く見られることが述べられている。<sup>5)</sup>しかし、往来物の語彙については、文章語を基調としつつ一般語も用いられているといふほうが適切である。したがって、往来物に用いられている語彙について考える第一の段階として、各語について一般語なのか文章語なのかということを明らかにしておく必要がある。

このようない点を明らかにするにあたって、本稿で考察の対象としている『普通用文章』が利用できるのではなかろうか。つぎに、この点について具体的に見ていくこととする。

まず、『普通用文章』の左ルビに用いられている漢語には、近世の往来物に例を確認できる語がある。たとえば、「ハイケン（拝見）」は、

貴札致<sup>きさついたしはいけん</sup>拝見<sup>はいけん</sup>候。

御状辱<sup>ごじやうかたじけなはいけん</sup>拝見<sup>はいけん</sup>候。

など頭語の例があり、『消息往来』にも、

拝見<sup>はいけん</sup> 拝聞<sup>はいぶん</sup> 拝詣<sup>はいじゆ</sup> 披見<sup>ひみつ</sup> 披聞<sup>ひもん</sup>。

（五三一一<sup>ペ</sup>）

とある。

このように、『普通用文章』の左ルビに用いられている漢語で近世の往来物に用例の確認できる語が、どの程度あるであろうか。この点を確認するため、『消息往来』との比較を行つた。<sup>(6)</sup>その結果、『普通用文章』の左ルビに用いられている漢語のうち『消息往来』の収録語彙と一致する漢語は、つぎにあげる二六語であった。

エンニン カクベツ ガクモン カナイ キゲン ケイコ ケンゴ サイソク サンヨウ ジギ シツレイ  
シユツセイ シンセツ セワ サウダン ゾンズ チソウ テイネイ ナイギ ナンギ ハイケン ヒヤウギ  
ビヤウキ ブジ ヤウジン レイ

左ルビに用いられている漢語は、さきほどから繰りかえし述べてきたように一般語と考えられる。したがつて、これら二六語は、すくなくとも明治期に一般語化していた往来物の漢語ということができる。

ところで、左ルビに用いられているということは、その漢語が一般語であるということを積極的に支持すると思われるが、左ルビに用いられない漢語すべてが、ただちに文章語といえるかということについては、保留が必要となる。しかし、左ルビに用いられているか否かということを基準として、次のような分類はできるかと思う。たとえば、「拝見」は『普通用文章』の左ルビに用いられているが、『消息往来』に「拝見」の類義語としてあげられている。「拝閲」「拝誦」「披見」「披閱」は『普通用文章』の左ルビに用いられない。したがつて、これら五語を、より一般語的な「拝見」とより文章語的な「拝閲」「拝誦」「披見」「披閱」とに分類するのである。このことについて、もう一つ例をあげて考えたい。「アシ（無事）」は『消息往来』に、

堅固　堅勝　無事　息災。

とあり、『普通用文章』では、

高門　御揃　御安寧　に御重齡奉ニ　欣　扶一候  
 草舎　瓦全送光　御降心可レ被レ下候

(五三一)

(一) (四)

のよう、「安寧」「瓦全」の左ルビに用いられている。ほかの明治初期の往来物にも「無事」が、左ルビに用いられている例を確認できる。

寒舍瓦全迎年仕候

(『往復日用』上二〇)

寒舍瓦全迎年仕候  
ワタクシノブジトシカサス

(『文章大全』一〇)

野居依舊瓦全

しかし、「堅勝」「息災」が左ルビに用いられている例は、見出すことができない。また、「無事」と類義の語に「無異」がある。この語も『消息往来』に、

手前何茂無異寵在。

(五三一一<sup>ペ</sup>)

とあり、明治期以前に往来物に用いられている語であるが、『普通用文章』をはじめ、明治初期の往来物の左ルビには用いられていない。さらに、次のように「無異」の語訛に「無事」が用いられている例がある。

次に幣屋無異過年仕候

(『作文教授』三〇)

當方無異加年罷在候間

(『実益新用』一〇)

「無異」が左ルビに用いられている例を見出せないと右の例とをあわせて考えると、「無事」は「無異」よりも理解しやすい語であったといえよう。また、「堅勝」「息災」に対しても同様の位置づけとなる。「無事」と「堅勝」「息災」「無異」とを比較したばあい、「無事」のほうが一般語化しているということになるのである。

このように、左ルビでの使用を基準として、類義語をより一般語的な漢語とより文章語的な漢語とに分けていくことができると考えられる。なお、ここで示した分類は、あくまで今回の調査範囲における左ルビの用例から行つたものであり、今後ほかの往来物を調査していくなかで修正する必要がでてくるばあいもある。今後の課題したい。

### おわりに

以上、明治期往来物の『普通用文章』の左ルビに用いられている漢語について考察を加えた。その結果、左ルビに用いられている漢語は、そのほとんどが江戸後期の口語資料『浮世風呂』『浮世床』『夢醉独言』に用いられていることから、当時の一般語であるとの結論を得た。また、『普通用文章』が往来物の語彙の研究にどのように利用しうるかについては、一般語化した漢語の指摘を可能にするということを提示した。このような、左ルビに用いられている漢語の性格や往来物の語彙の研究への利用については、『普通用文章』にかぎらない明治期の往来物に共通するものであると考えられる。

今後の課題としては、まず、多くの明治期の往来物について本稿と同様の調査を行い、左ルビに用いられている漢語のリストを作っていくことがあげられよう。また、本稿では、個別の語の語史については考察を加える

「」ができなかつた。」でとりあげた各語について、たとえば、往来物が一般語を取りこんだのか、往来物に採録され、書簡用語として使われるうちに一般語化したのか、などについて考えていく必要もある。

### 注

- (1) 母利（一九九四）六七べを参照。
- (2) 土屋（一九八七）一六四べを参照。
- (3) 『和英語林集成』初版は、見出しの語の頭に記号を付すばあいがある。」で問題としている+印については凡例に、  
+ (stand for) word used only in books or obsolete.  
とあり、「文章語・古語」を示す記号である」とがわかる。」の記号は、再版ではすべて削除されているが、三版になると、あたりが用いられてる。ただし、三版の凡例には、  
+ (stand for) obsolete.
- とあり、+印は「古語」を示す記号となつてゐる。なお、『和英語林集成』三版では「シサク」「ヤイヤウ」とある、  
+印を付されていない。
- (4) このほかにも、『和英語林集成』初版で「シサク」「セイヤウ」に+印が付されているのは、古い意識を残したものであるという考え方があらう。
- (5) 橋（一九七七）四六七～四七二べを参照。
- (6) 『消息往来』は、石川（一九八八）に「消息文にしばしば使われる単語・短句・短文のみをあつめて書きならべてい  
る」（五〇ペ）と述べられてるので、おおよそ、どのような語が近世の往来物に用いられているのかを知るには適  
当であると考え、比較資料とした。

### 〈参考文献〉

- 石川松太郎（一九八八）『往来物の成立と展開』雄松堂  
橋豊（一九七七）『書簡作法の研究』風間書房

土屋信一（一九八四）「漢語流行の一側面——明治期女子用往来物を資料として——」『国語語彙史の研究』五

母利司朗（一九九四）「明治△学制▽期における国語作文教科書の諸問題——国語教育前史論三——」『国語国文学』八

学▽一一

山田俊雄（一九七七）「漢語研究上の一問題——漢語層別化の試論——」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院  
湯浅茂雄（一九九二）「雅俗対訳資料と語彙研究——『雅語訳解』『古言訳解』を資料として——」『日本近代語研究』一

△テキスト▽傍線部は、本稿で用いた略称。

『消息往来』『文林節用筆海往来』『用文章綱目』（以上『日本教科書大系 往来編』第八卷）『浮世風呂』（新日本古典文学大系）『浮世床』（稻垣正幸・山口豊『新話浮世床総索引』武藏野書院）『夢醉独言』（稻垣正幸・山口豊『夢醉独言総索引』武藏野書院）『和英語林集成』初版（TUTTLE 復刻版）三版（講談社学術文庫復刻版）  
『民間往復日用文』（宇喜田小十郎著 明治一二・一一刊）『必携作文教授書』（大島東陽編 明治一一・一二刊）『漢語文章大全』  
（宇喜田小十郎著 明治一二・一一刊）『類語実益新用文』（沢田寛一著 明治三一・一△三版▽刊）  
（大学院後期課程学生）

表 「普通用文章」の左ルビの漢語

アングワイ	オウチヤク
アンシン	カウ
イシャ	カクベツ
イツシヨ	ガクモン
インシヤウ	カナイ
エンニン	カンシン
エンハウ	カンジン
風	風
床	床
夢	夢
夢	夢
夢	夢
夢	夢
夢	夢
風	風
床	床
床	床
床	床
風	風
風	風
風	風
風	風
風	風
夢	夢
夢	夢
夢	夢
夢	夢
夢	夢
ギン	ギロン
	キメイ
	キブン
	キ
	カン(ズ)

グチ クワジ グワ クフウ  
ケイコ ケシキ ケンゴ ゴクラク  
コンイ サイキ サイソク サウダン  
サタ サウレイン ザンネン ザンネン  
サンヨウ サンヨウ

風 風 風 風 風 風 風 風 風  
床 床 床 床 床 床 床 床  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

風 風 風 風 風 風      風 風 風 風      風      風 風  
床 床 床 床 床 床      床      床      床 床      床      床 床  
夢 夢 夢 夢 夢 夢      夢      夢      夢 夢      夢      夢 夢

チャ チリ テイネイ  
ドウグ トウジ トウジン  
トウリウ ナイギ ナン  
ネン ネンゴウ ナンギ  
ハイケン ハイケン ナンギ  
ヒザウ ヒヤウギ ヒヤウギ  
ビヤウキ ビヤウニ ビヤウキ  
ヒヤウバ ピンボウ ピンボウ  
フウガ ベントウ ベントウ  
ヘンジ ブジ ホウコウ

風 風 風 風 風 風 風 風 風  
床 床 床 床 床 床 床 床  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

ホン  
ボン  
メイジン  
モヨウ  
ヤウジン  
ヤウス

風 風  
床 床 床 床  
夢 夢 夢 夢

ヤク  
ヤクシヨ  
ヤクニン  
ヤゼン  
ヨウジ  
リツハ

風 風 風  
床 床 床  
夢 夢 夢

レイ  
レウギ  
レウリ  
ロ

風 風 風  
床 床 床  
夢 夢 夢